

2008年9月15日
第178号

題字 住谷悦治



燎原社
(京都の民主運動史を語る会)

代表 岩井忠熊

事務局
京都市左京区高野東開町1-23
第三住宅33-302 井手幸喜
〒606-8107
tel & fax 075 (722) 3823

1929年山宣と京都のプロレタリア美術運動
戦後伏見の女性運動を語る
高山寛君と私の六十年
「湯浅貞夫資料を記録する会」からの中間報告(1)
連載 忘れ得ぬ人 敗戦直後の谷口善太郎さん

清水 紀子	2
岩井 圭子	4
宮田栄次郎	7
井手 幸喜	10
矢島藤太郎	11
BOOK 『靖国』と日本の戦争	9

例会案内／情報スクラップ／編集後記

長編 記録映画
「テントからの報告」
1966
小川分会の闘争を描く



▲記録映画「テントからの報告」より

上京区小川通り今出川上がるにあった「ニッポンプロセス」が1963年9月8日、突如工場を閉鎖した。京都印刷出版労組小川分会(23人)の存在を嫌った経営者が、別会社をつくり操業、非組合員を転動させた上、組合員の就労を拒否した。小川分会では、入口にテントを張り、ここを拠点に反撃に出る。平均年齢23歳、「守る会」の会員は三千人を超え、支援は全国に広がっていった。

この映画は、65年に劇団京芸が上演した構成詩劇「テントからの報告」を基に、京都労映・小川分会・劇団京芸の共同企画としてつくられた。監督は大映をレッドパージされた村上進、カメラマンは黒田清巳(「裸の島」で有名)ら多くの映画人が協力、65年11月20日から66年3月20日にわたる4ヶ月間の小川分会の闘争を記録している。モノクロ56分。京都はもちろん東京・読売ホールで10日間上映されるなど当時、大きな反響をよんだ。小林多喜二の『蟹工船』が若者の間で話題になっていく今日、42年前の青年労働者の不屈の群像はどう映るだろうか。

ちなみにその後小川分会は、印刷工業組合などのあつせんを受け、解決金で「新日本プロセス」を設立(68年)、今年40周年を迎えた。また、かみがわ出版は新日本プロセスにより設立された会社である。

執筆者紹介

- 清水紀子(しみず・としこ) 主婦。京田辺市在住。
- 岩井圭子(いわい・けいこ) 主婦。右京区在住。
- 宮田栄次郎(みやた・えいじろう) 神戸経済大(現神戸大)卒業、労働運動に入り、京都合同繊維労組委員長、京都勤労者学園専務理事、京都社会労働問題研究所所長などを歴任。北区在住。
- 井手幸喜(いで・こうき) 本会世話人。京都橘大学。
- 矢島藤太郎(やじま・とうたろう) 故人。元山城町議会議員。

1929年 山宣と 京都のプロレタリア美術運動

清水 紀子

(1) 「カーペー大衆化」の 山宣胸像について

1979年、山宣歿50周年の記念の年に、謎のロシア語「Капе Таишюка」(実物は筆記体)と「1929. 7」の数字が刻まれた石ころの山宣胸像が花やしきで発見されました。謎のロシア語は小田切明徳氏によって「カーペ・タイシユールカ」と解説され、その意味は「共産党の大衆化」と説明されています。『山宣研究』第5号1980年所収、山宣歿50周年記念事業実行委員会ニュースNo.8、1979年)

「その頃はまだ、「共産党」という言葉は公然と口に出せなかったから、みなは、カー・ペー(K.P. コムニステイツシエ・バルタイの頭文字)と言っていた。」

と記されています。当時共産党はカーペーと呼ばれていたようです。「Капе Таишюка」は、「カーペー大衆化」と刻むつもりでロシア語の文字をローマ字のように使ったものと思われる。山宣胸像は他にもあるので、作者不明とされるこの胸像をここでは「カーペー大衆化」の山宣胸像と呼ぶことにします。

(2) 1929年7月京都のプロ レタリア美術展覧会(移動展)

京都のプロレタリア文化運動は山宣暗殺から一気に高揚したと言われています。暗殺から4ヶ月後の1929年7月5〜7日には京都初のプロレタリア美術展覧会が京都日日新聞社階上で開催されました。この展覧会についての記述はナツ

ブ(全日本無産者芸術団体協議会)の雑誌『戦旗』にあります。(『京都地方労働運動史 増補版』渡部徹・編著1968年)

『戦旗』1929年8月号には京都のこの展覧会の貼りビラの写真が掲載されています。また『戦旗』1929年9月号には、美術家同盟京都支部の名で「京都に於けるプロ展」という記事が載っています。この記事には、当局の厳しい監視と弾圧の中、総作品140点の内38点の作品が展覧会の会場から押収されたこと、やつと取り戻した時には彫刻はこわされ絵は切り取られていたこと、最終日の夜、大月源二を迎え批判会を開いたことなどが記されています。なお、この展覧会は関西地方移動展として京都から大阪、神戸の順に1929年7月上旬開催されたもので、大阪、神戸の報告も一緒に掲載されています。

「カーペー大衆化」の山宣胸像には「1929. 7」の数字が刻まれています。この数字は「カーペー大衆化」の山宣胸像が1929年7月の京都のプロレタリア美術展覧会

(移動展)に際して制作されたことを示すものと考えております。

(3) 作者は吉田清吉か

1929年7月の京都のプロレタリア美術展覧会については目録が現存しています。この目録は岡本唐貴が収集したプロレタリア美術関係資料の中に含まれており、美術評論家連盟会員・菊地明子氏のご尽力をいただきました。この目録の題名は「プロレタリア美術展覧会目録」主催は、日本プロレタリア美術家同盟京都支部となっています。出品された作品名と作者名が、絵画、ポスター、漫画、彫刻などに分けて掲載されています。山宣関係の美術作品としては

大月源二 山宣の死顔スケッチ
吉田清吉 山宣スケッチ

吉田清吉 山宣胸像

の3点が記載されています。ここに1929年7月吉田清吉が山宣胸像を出品したという記載があつて、一方「1929. 7」と刻まれた「カーペー大衆化」の山宣胸像があるわけですから、この資料から「カーペー大衆化」の山宣胸像は吉田清吉が1929年7月京都のプロレタリア美術展覧会(移動展)のために制作した作品である可能性が高いと考えております。

また目録によると、この展覧会に出品している美術家の中で吉田清吉

と奥村信吉がともに11点を出品して
いて最多です。奥村信吉（奥村究果）
は優れた漆芸家でありプロレタリア
美術家同盟京都支部の中心人物でも
ありました。（「ソビエト同盟を守れ」
漆器丸盆 1931年奥村信吉作
京都市美術館所蔵）彼ら2人が中心
となって1929年7月の京都のプ
ロレタリア美術展覧会が開催された
ものと思われまます。

そして二人はともに自宅に山宣の
デスマスク（石こう）を秘蔵してい
ました。「山宣研究」第8号「デス
マスクを追って」大原健次（198
3年）には奥村信吉の夫人からの聞き
取り調査が報告されています。そ
れによれば吉田清吉は奥村信吉やほ
かの仲間のために山宣デスマスクの
複製をいくつも制作したとのことだ
す。

（4）田村敬男と吉田清吉

1928年吉田清吉は田村敬男の
もとで救済会寄付金募集のためにレ
ーニンの胸像を制作しました。（『労
働農民新聞』1928年7月21日
第55号、「或る生きざまの軌跡」ひと
の綴りしわが自叙伝」田村敬男編1
980年、「燎原」第175号200
8年）

『追憶の山本宣治』（田村敬男編著
1964年）には1929年3月1
5日三条青年会館の労農葬に対する
懸命の取り組みの様子が述べられて



これは上左の
美術展
プロレタリア
の貼り
ロシア語
山宣の胸像。

います。労農葬の映画撮影、追悼歌
作詞、追悼劇上演とあわせて、プロ
レタリア美術家同盟京都支部では、
三条青年会館の演壇に飾る洋画など
を担当しました。奥村信吉が中心と
なり、彫刻家の吉田清吉が応援して
労働者と農民の絵を制作したと記さ
れています。そのあとの文章に

「更に後に吉田清吉君が彫塑で、
山宣胸像を作成したものが、仁保
芳男同志の未亡人光枝君の話で
は、同志の処に戦後まで保管され
ていたとの事である。」

との記述があ
ります。この
記述の山宣胸
像の所在は不
明です。「カ
ーペー大衆
化」の山宣胸
像とは来歴が
異なるようで
すが、吉田清
吉が山宣胸像
を制作してい
たことを示す
資料となりま
す。さらに
『追憶の山本
宣治』によれ
ば、

「僕はこの日（三・一五）から検
束留置され、引続き四・一六事件
に関連して徹底的に取調べられ、
拷問のため七条署の留置所入口で
失神卒倒し、安田徳太郎博士の往
診を煩わした結果、同博士の診断
で、強制的に監視付で京大附属病
院内科に検束のまま入院した。

若し安田博士がいられなかった
ら、拷問の結果、僕の人生絵図は
どう変っていたか知れない。監視
が解除されたのは、七月二十六日
であった。」

と記述されています。1929年7

月京都のプロレタリア美術展覧会
（関西地方移動展）の準備も展覧会当
日も田村敬男は参加できなかったも
のと思われまます。このためこの展覧
会についての証言を残せなかったの
かもしれません。

（5）おわりに

山宣関係のプロレタリア美術の作
品としては大月源二の「告別」、矢部
友衛の「労働葬」、橋浦泰雄と大月源
二のデス・スケッチなどが有名です
が、ここでは山宣の地元、京都での
取り組みをまとめてみました。19
29年プロレタリア美術家同盟京都
支部では奥村信吉、吉田清吉を中心
に、3月15日の労農葬の取り組みに
参加し、7月5〜7日にはプロレタ
リア美術展覧会（移動展）を開催し
ました。吉田清吉が山宣デスマスク
の複製と山宣胸像とを制作したこと
も判明しています。そして「カーペ
ー大衆化」の山宣胸像の作者は吉田
清吉である可能性が高いと考えてお
ります。

京都のプロレタリア美術の作品や
資料はまだどこかに眠っているの
はないかと思えます。またプロレタ
リア美術家同盟京都支部ではいろ
んな美術家達が活動していたはずで
すが、その足跡は明らかではありません。
皆様のご教示をよろしくお願
いいたします。

（しみず・としこ）

戦後伏見の女性運動を語る

元・新日本婦人の会伏見支部事務局長 岩井 圭子さんの講演から

これは平和・民主主義・革新をめざす伏見懇談会が一九九五年九月に行った例会での岩井圭子さんの講演「戦前戦後・伏見の女性運動を語る」のうち、戦後部分の概要です。「伏見革新懇」第七号（九六年二月二日）からの転載。

タンポポの種になって

婦人の政治への参加が初めて行使されたのは一九四六年四月の衆議院選挙からでした。全国で婦人議員が三九名も当選します。こんなことは、その後もおそらくなかったと思います。京都でも婦人候補が三人立候補して、全員が当選されました。

一九四八年に男女共学制になりました。それまでは小学校の一・二年生は男女共学ですが、三年生からはずっと男女別学。そして中学校からは、中学校と女学校に分かれていました。それで男女共学になると、朝なかなか男女が同じ教室に入っていない。「あなたたち、早く教室に入りなさい」といっても、教室のなかでこっちで女の子がひとかたまり、こっちで男の子がひとかたまりといった具合で、今では考えられないような状況もあったのです。当時、教育委員は公選制でした。こ

の年に教育委員の選挙があり、京都市の四名の定員のなかで婦人三名が当選する。当選された三人の女性の教育委員の中に中井あい先生がおられました。立候補されて大筋の辻々に立って街頭演説をされたり、私たちも、その当時はマイクもなく、紙でメガホンを作って「中井あいをよろしく」といって伏見中を連呼して歩いたのを覚えていています。

一九四八年というのは色々な意味で節目の年ですが、三月八日に第一回の国際婦人デーが円山音楽堂で開かれ「女性解放されたのだ」「母と子を保護せよ」「政治経済で男女は平等になった」などのスローガンを掲げて三五〇〇人が集まりました。一九五〇年になりますと朝鮮戦争が始まりますが、二月にはストックホルムアピールが出され、世界的な平和運動の出発点となって原子兵器廃止の署名運動が野火のように広がっていききました。瞬く間に

二千万の署名が集まりました。さらに、一九五四年にはビキニ環礁の水爆実験によって日本人が三度目の被害に遭うということで、原水爆禁止の署名運動が始まり、瞬く間に全国に広がっていく。そうした中で日本婦団連が、世界母親大会の開催を提案するわけです。

これは全世界で支持され、一九五五年七月七日にスイスのローザンヌで世界母親大会が開催され、日本代表団の一人に中井あいさんが選ばれて参加されました。会場全体が「ノーモアヒロシマ、ノーモアナガサキ」という言葉で日本代表団を迎え、最後には全員で「原爆許すまじ」の大合唱をして世界母親大会は大きな成功をおさめます。

このときから「いのちをうみ出す母親は、いのちを育て、いのちを守ることのぞみます」の有名なスローガンが使われるようになったのです。

中井あいさんは、「この大会でみんながタンポポになって、世界中にこの大会の感激を伝えて、平和のタンポポの種になりましょう」と書いておられます。この世界母親大会を受けて日本

母親大会が開かれるようになりまし
た。

平和・子ども・地位向上へ…闘う

一九六〇年には安保闘争が全国的に大変な盛り上がりを見せます。その中で、小児麻痺の生ワクチンを求める運動が起こります。

小児麻痺が全国的に蔓延をして、次から次へと子どもさんが亡くなっていく。亡くならなくても後遺症が残って大変なことでした。そんな中で、飲めば効くという小児麻痺の生ワクチンが外国にはあることが判り、連日のように厚生省に全国からお母さんが押しつけていって「この生ワクチンを緊急に輸入してほしい」と要求をするわけですが、厚生省はなかなか腰をあげない。そこで、京都府にも申し入れを行い、当時の嵯川知事は「厚生省が輸入しないのだったら、京都府が独自でも衛生部長を派遣して、すぐにでも輸入させよう」と約束されて、非常に心強く思いました。

そして、全国的な大きな運動の盛り上がりの中で、厚生省も六一年六月二二日にソビエトから一千万人分の生ワクチンを輸入しました。保健所だけでは足りないものから、各小学校でも「今日は生ワクチンを投与しますから、みんな来てください」と、子どもをおんぶしたり、抱っこしたりしたお母さんが学校へどつとやって来て、学校で投与してもらおうというような状況もあ

りました。

やはり、平和の問題でも子どもの問題でも職場で差別をなくす問題でも、切実な願いを実現するためには闘わなくてはならない。婦人たちは安保闘争の中でそういったことを身につけていったのだと思います。

一方で毎年母親運動が全国で百万人の人を組織していったといわれるくらい大きく盛り上がります。

そして、一九六二年に第八回日本母



京都で開催された第8回日本母親大会（1962年、立命館大学）

親大会が関西（京都で分科会、大阪で全体会）で開催されます。母親大会は、第七回まで東京で開かれていたのが、関西で初めて開かれたわけです。

この京都で行われた母親大会は大変な盛り上がりを見せました。蛭川知事も分科会の助言者になられるとか、男性の教職員もあけて協力するなど大きく成功させることができました。

伏見での新婦人結成

母親運動は一年に一回顔を合わせて話し合いをする。

しかし、一年に一回集まって話し合うだけでは山積する女性たちの要求を本当に実現させていくことはできない、恒常的な女性の組織が必要なのではないかという願いが強くなってくるわけですね。

安保闘争があり小児麻痺の運動があり、母親大会を成功させたという生き生きとした雰囲気の中で、まだそのときは名前も決まっていまぜんけれども、準備

会が六二年の四月に発足しました。

伏見でもそれに向けていろんな運動をやって、新婦人を作っていくという事になりました。例えば、「丹波橋駅を良くする会」。丹波橋駅というのは当時、遮断機の上がっている間のないような踏切でした。近鉄と京阪の電車が何本も通る。それを待ちきれなくて子供さんが遮断機をくぐって普通電車が通りすぎたあと、急行が来て轢かれて亡くなるという事故が起こる。

駅を改善してほしいという沢山の署名を持って区長さんと警察署長さんとかけあいました。すると区長や警察署長が「私たちがしなければいけないことを皆さんがしていただいて、本当にありがとうございます」といわれて、たくさんのカンパも貰ったりしました。大阪の陸運局と京阪電鉄の本社へも交渉に行きました。

そのほかにも深草に「民主教育を守る会」、住吉では、「区画整理反対の運動」も起こります。少し後には、橋本製作所の偽装閉鎖反対の運動も始まります。

また、私たちの日常生活の中でも、そのころゴミ集めが定期的に来なくて、一週間に一度か、一〇日に一度か分からないのです。夏になると、うじ虫がすごくて、「ちりんちりん」の音を聞き逃した人はそれでおしまいと。そんなことで定期的なゴミ集めにきてほしい。汲み取りの料金もまちまちで、人によって違う。いまでは考えられな

いことですが、そういうことを市へ請願にいたり、対市交渉をしたりしました。

私もそのころまだ三十そこそこで運動の経験もないのに、いろんな所へしよつちゅう行って、胸がドキドキして何をどう言っているのかという思いでいたのを今でも覚えています。こうした目まぐるしい動きのなかで新婦人の発足を迎えるわけです。

全国的には一九六二年一〇月一九日に結成され、京都府本部は一〇月二三日に結成されます。伏見支部は六三年二月に深草にある摂取院というお寺に四〇人くらい集まって結成総会をしました。

脱脂ミルク給食反対の運動

最初の運動は脱脂ミルク反対の闘いでした。そのころ学校給食に脱脂ミルクが使われていて、六三年に文部省は安保条約の日米経済協力の一つとして四〇億円使って八万五千トンもアメリカから買いつけていました。この脱脂粉乳はアメリカでは余剰農産物、牛や豚の餌でした。給食では大きな鍋でそれを煮るんですね。すると、学校中がむかつくような匂いはするし、それに余剰農産物ですから、スコップであつかわれていたような代物で、中から靴が出てきたりスパナが出てきたり、クギなんて日常茶飯事でした。そんなものを日本の子供たちに飲ませられるかということ、脱脂ミルク反対のパン

フを作って、反対運動をくりひろげました。それが、一番最初に取り組んだ大きな運動だったので。

地域の要求運動では桃陵団地の保育所づくりがあります。伏見には公立の保育所が南浜に一カ所しかなくて、私も結婚して仕事をしていたのですが、いざ子どもが生まれるとなると本当にどうしようもなくなる。親と同居しているとか誰か子供を預かってくれる人がいなければ働き続けることができません。保育所の問題は深刻でした。そして桃陵団地では新婦人が結成されると同時に、この団地の中に保育所を作ってほしいという要求を掲げて運動をしました。

この願いかなえない

一九六六年一二月、愛知県の猿投町で保育園の子供たちが登園する途中、横断歩道にダンブカーが突っ込んできて一〇人の園児と一人の保育士が即死、二〇人が重傷を負うという大事故が起こりました。

この事故をきっかけにして「子どもを交通事故から守ろう」と全国で運動に取り組み、京都でも、ここには横断歩道、陸橋、ガードレール、カーブミラーなどたくさん要求を出し、蜷川知事や府警と話し合いました。私たちが交渉に行く、すでに京都府の地図に要求別にカラーピンが押し付けてあり、一目瞭然、要求が判るようになって、さすが民主府政の知事だと感激し



「交通事故から子どもを守ろう」と、中井あい会長を先頭に蜷川知事と交渉（1967年）

ました。多くの地域要求が次々と実現し、民主府政について多くのことを学びました。

蜷川民主府政の時代

新婦人は民主府政をすすめる婦人の会の一体として、会の中で大きな役割を果たしてきました。

伏見でも一九六六年、七〇年の知事選挙には全国から沢山の人が支援に駆

けつけてくれました。常時三〇人から四〇人の人が中井先生の家に泊まっていたのです。次々とやって来られるものから、とうとう中井先生の家の八畳間の根太板が落ちてしまいました。畳の部屋だけでは入りきれずに、廊下にも沢山の人が寝ているような状況でした。全国から手弁当で、たくさんのカンパを集めて支援に来てくださる。当時、府政というのは民主的だったんですが、京都市政のほうは、高山が居直って以来、革新でなくなっていたのです。ね。それで民主市政を取り戻そうと頑張って、一九六七年の二月に民主市政が誕生します。その時は富井さんがチビッコ広場を市内で三〇〇か所作ると公約されたものから、どこかにチビッコ広場を作る場所はないかと伏見中を足を棒のようにして探し回りました。

その当時は、街灯だとかガードレール、保育所とかいろんな地域から要求を持ち寄りまして、よく区に対して交

渉をしました。本当にこの願いがかなわなければ、子供たちのいのちにかかわる、明日からの暮らしにかかわるといった切羽詰まった思いでした。そうした思いが伏見の女性を動かしていたんだと思います。

今お話ししてきましたように、伏見で新婦人が結成されて一〇年間でこの様な大きな運動をしてきたわけです。現在では、革新運動を進める上で新婦人においては語れないような女性の団体になってきていると思います。

先日、創立時から活動されていた方にお電話した時、「あの頃は、なんであんなに頑張れたんやろうね」と当時を振り返って、「あの頃が良かったな。私の人生の中で一番輝いていたと思います」と言われました。私は事務局長として苦勞も多かった時期ですが、今になってみると、この一〇年間は草の根の女性の組織を地域に根づかせるという大事業をやって来たんだと思います。

訂正 177号「戦前立命館学園と左翼運動」8頁2段後ろから11行目「言語統制の下で」は「言論統制」に訂正します。

176号「忘れえぬ人 長谷部文雄さん」の文章の中で「浅野勉」とあるのは間違いで「朝野勉」に訂正します。

前号、印刷前の段階で作業データの取り違えがあり、最終校正の訂正が反映されない箇所が発生したことが原因です。

高山寛君と私の六十年

ゆたか

宮田栄次郎

二十年あまり前（一九八六年・昭和六十一年）、還暦を迎えた私は、『京都労働運動外史』と題する自分史（新書版、二二七ページ）を刊行、友人や知人に配った。一九四五年（昭和二十年）の敗戦で軍隊から帰って神戸経済大学（現在の神戸大学経済学部）に復学したのち、京都の労働運動に参加して総同盟府連の書記局長を振り出しに、合同繊維労組の専従役員、京都勤労者学園専務理事、京都社会労働問題研究所長を歴任した四十年間の歩みを綴ったもののだが、その九十ページに次のような記述がある。

翌年、おやじさんの要請で市の秘書課に移ったいきさつなど、少なからぬエピソードがあるのだが、今のところはまだ秘話のままにしておこう。」

その高山君は七十八歳になった二〇〇七年（平成十九）春に府会議員を十期四十年で引退、秋の叙勲において旭日中綬章を授与され、十二月

「合同繊維書記局には、一九五三年（昭和二十八年）の四月から十二月にかけて、高山寛（ゆたか）君が加わった。彼は京都市長の子息、いまは自民党の京都府会議員となつて議長も務めたが、当時は京都産業労働調査所や関西労働調査会議で活躍していた。故あつて合同繊維書記局に「わらじ」を脱ぎ、囑託として調査活動を担当した。高山君を預かった経緯、そし

には盛大なパーティが開かれた。彼の経歴はすこぶる起伏に富んでいてユニークなのだが、世間に知られていない部分も少なくない。もはや公人ではなくなつただから、そろそろベールを払うのも一興かと、私との関わりのある部分につき、ご本人の了解を得て書きあげてみた。

「民統」京都市長選挙のころ 共産党東山群委員長だった

寛君は一九二九年（昭和四）七月の生まれ、私より三つ下である。父君の義三氏は京都大学出の弁護士、まだ学生の身分で京都労働組合のロカルセンターだった友愛会の支部長に担がれるという特異な経歴をもち、戦後も京都の政界で自由党支部幹事長・京都民主党委員長をへて社会党府連の顧問となつていた（寛君は実子でなく、生みの母は義三氏の妹さん）。

私が寛君と知り合ったのは一九四八年（昭和二十三）の秋、総同盟京都府連の書記局に入って間もなくだった。当時の総同盟は、烏丸四条上が東側にあつた高山法律事務所の一角に間借りしており、寛君も時々おやじさんの事務所に立ち寄っていたからである。

私が京都の労働運動に加わつたころは、いまの連合や全労連はもちろん、総評や同盟さえまだ生まれておらず、共産党の指導する産別会議

（全日本産業別労働組合会議）と社会党系の総同盟（日本労働組合総同盟）が対峙していた。

私は大学二年のときから共産党に入つていたのだが、総同盟は社会党一党支持の組織であり、共産党を公然と名乗つたのではすぐ排除されようから、共産党籍は秘匿し、改めて社会党にも加盟した。こうしたいわゆる「二重党籍」は昨今ではまず考えられないが、「疾風怒濤」の当時は決して例外ではなく、社会党に潜り込んでいた「ご同類」を私は何人も知つていた。

このころ、寛君も共産党員だった。同志社大学の学生運動に加わる一方、居住する東山区の群委員長としてがんばつていた。

私たちの付き合いが急速に接近したのは一九五〇年（昭和二十五）、高山義三氏が京都市長選挙に出馬したためである。彼は当時の京都の民主団体を総結集した全京都民主戦線統一会議（民統）の統一候補として、社会・共産両党をバックに立ち、私は総同盟から民統の選対本部に送り込まれた。義三氏は総同盟の「大家」でもある。私は昼夜を分かたずその当選のため奮闘した。

この選挙は保守が分裂、民統のほか民主自由党と民主党の加わる三つ巴の戦いとなつたのだが、その渦中で私は寛君としよつちゆう行動を共にした。ある時は行動隊を乗せたト



右・高山氏、左・宮田氏（2007年12月）

ラックを夜通し走らせ、相手方の選挙ポスターの上にわが方のポスターを貼り付けたり、ポスターの束を実力で奪い合うなどかなり手荒い行動も演じたものである。

この戦いは保守の分裂に助けられて民統が漁夫の利を獲得、義三氏は念願の京都市長となったのだが、私は不法文書配布の指揮容疑で太秦警察署に検挙され、罰金二千元（今の貨幣価値なら数万円になろうか）を申し渡された。罰金は新市長のポケット・マネーで処理され、義三氏から「苦勞さんだった」と河原町四条上がる東入るのビール・レストランで慰勞された。

ところで、一九五〇年（昭和二十五年）の二月に実施されたこの京都市長選は、思わぬ副産物を伴った。京都市知事選挙である。三年前に最初の公選知事となった木村悖が市長選にまつわる資金違反に問われて辞任、予期せぬ知事選挙が訪れたのである。民統は吉田茂首相に中小企業庁長官を追われた蛭川虎三京都市大教授を統一候補に決定、社会・共産両党の協力を取り付けた。

都市部中心の市長選と違って保守的な農村に広くまたがる上、今回は保守も統一候補の擁立に成功して保守の一騎打ちとなったのだが、勢いに乗る民統は、四月の知事選においても勝利を収めた。

寛君を合同織維書記局で預かっていたいきさつ

一九五三年（昭和二十八）の春先だったか、思い余った顔付きの寛君が私を訪ねてきた。おやじと対立して家を飛び出してきたので飯がくえない、助けてほしいという。トラブルの主因はどうやら彼がつきあっていた南座のモギリ嬢（北朝鮮系の女性）と手を切れ、切らぬの話しらしい。

当時、私は京都の中小織維労働者の結集体を目指して結成した合同織維労組の専従役員をしていたのだが、ほかならぬ寛君の頼みだからと周囲を説得して調査担当の嘱託に迎えることにしたものの、貧乏財政のこととて生活費のすべてを賄えるだけの金は工面できず、思い切つて義三市長に相談をもちかけた。そこはやはり親子である。二つ返事で「足りない分は自分が持つから毎月取りに來い。ただし本人には内緒で」ということになった。こうして、給料日前になると市長室へ出かける「仕事」は半年あまり続いた。

ところで、次の京都市長選は一九五四年（昭和二十九）の二月だった。最初は社共に推されて当選した高山市長だったが、このころは社会党の左右分裂を契機に党を離れ、共産党からも保守への接近を激しく攻撃されていた。そしてこのときの市長選は、前回と逆に現職の高山氏が保守

票を取り込んで優位に立ち、一方、明治の元勳・西園寺公望の孫の公一氏を担いだ革新は、社会党の一部が前回も立った田畑警門氏に流れるなど割れていた。

その選挙の近づいた一九五三年（昭和二十八）の暮れ近く、義三氏から至急会いたいとの連絡をうけた。出かけてみると、「寛を市の秘書課に入れようと思うが、君はどう思う？」と聞かれた。寛君がプロの活動家に徹するのは無理とみていた私は即座にOKした。ところが市長は、ついでには条件が二つある。まず、中退した形になっている大学へ行き直さしてほしいという。私は「将来どんな方面の仕事をするにせよ、行きかけた大学だけは出たほうがよいから、その件は責任をもつ。残りの一つは何ですか」と問うと、女と別れさせてくれ、とのこと。「それは引き受けかねる。男女のことは他人がとやかく口を挟むことではない。本人の気持ちに任せるのがいいのでは。一応話してはみるが」と答えた。

早速、寛君に義三氏の申し出を伝えたところ、女性が病気がちでさほどの抵抗もなく落着、市長再選後の翌年四月から、寛君は晴れて市の秘書課に勤務することとなる。

市役所勤務時代と湯浅晃氏

寛君の市役所勤めは、このあと、京都府会議員に打って出る一九六七

年（昭和四十二）四月まで、十二年半にわたって続くのだが、われわれの友人関係は変わらなかつた。

寛君は義理堅くて「友達思い」だった。親友の一人に湯浅晃（みつる）君がいた。同志社の同窓で共産黨員。私が知り合ったころは京都市の臨時職員組合の委員長で組合専従をしていたが、人員整理の最中で、職場に復帰すれば解雇必至とあって、知人の手づるで北海道の高校教師となる決心を固めた。一九五三年（昭和二十八）の春先、その歓送会が四条鴨川べりの東華菜館で開かれた。呼びかけ人の中心は寛君で、「われわれの力が足らず、湯浅君の『都落ち』を阻止できなかったが、そのうち必ず呼び戻すからそれまで辛抱してくれ」と挨拶した。約束をたがえず、寛君はおやじさんの説得に成功、四年後の一九五七年（昭和三十二）七月、湯浅君は京都市立伏見高校の教諭として京都へ戻ってきた。

それから半世紀、湯浅君は京都教職員組合の委員長・京都総評議長など歴任、「京都市民報」の社長も務めた。彼は酒の一滴も飲めぬ下戸であり、浮いた噂一つ聞かぬ堅物だったが、二〇〇六年（平成十八）に死去するまで、アルコール好き・女好きの寛君との仲は切れなかつた。

ところで、高山市長についていえば、一九六六年（昭和四十一）に四期十六年の在任を終えて退任、新た

「靖国」と日本の戦争

岩井忠熊著

新日本出版社

靖国神社の政治的性格を幕末維新の創建から説き起こし、台湾出兵からアジア太平洋戦争までの海外出兵の戦死者慰霊の実態を告発した労作である。

第1章では、明治天皇の勅命で創建された靖国神社の前身と、『靖国神社忠魂史』（1935年）などをひもとき、幕末維新时期いかにいいかげんな矛盾した基準で「国事殉難者」として祀られたか、祀られなかったかを、いくつもの例を示していて興味深い。

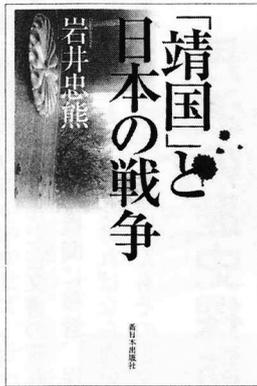
その合祀基準は結局のところ天皇のために戦って死んだことに集約されていく。「英霊」という呼び方はそのことを物語っている。またそう呼ぶことによって戦没者を出した戦争（海外への侵略戦争）を美化してしまった。

2章「明治国家の対外政策」、3章「第一次世界大戦と大正デモクラシー」、4章「アジア太平洋戦争」と日本近代史を分かりやすく、最新の研究成果を活かしながら述べてい

「英霊」の政治的利用を衝く

る。

5章「海外派兵と軍国主義」では、靖国公式参拝や「英霊」という言葉を分析するとともに戦死・戦病死の実態について、著者の実体験を交えて記している。その中で、陸軍では、戦死者の遺体は「戦場掃除」の対象でしかなかったことが明らかにされ



ている。

最後に著者は、「国が戦没者追悼の無宗教施設をつくれればいい」という説について「これからも戦没者が出ることを予想して、その人たちが国民的に追悼する施設としようとする意図と結びついてしまふ」と反対する。そして「戦没者はやはり人それぞれに追悼するのが一番ただしあり方」と結論づける。

(湯浅)

(172頁・1890円)

に設立された国立国際会議場の館長となった。

高山市政の評価は人によって大きく分かれる。社共両党の支持で当選したものの、次第に右寄りにスタンスを移した高山さんは、「革新」を堅持した蛭川さんとの対比で保守・反動と叩かれることも多かったが、イデオロギーを横に置いて行政家としてみる限り、ご本人がアイデアマンだった上、広くブレイクを集めることにもたけていた。戦後九人を数える歴代市長の中では、やはりピカ一だったと言えるのではないか。

府議会議員10期で引退

寛君が京都府議会に初めて議席を持ったのは一九六七年（昭和四十二）、三十七歳のときだった。父君の義三氏が七十四歳で京都市長を退くのと入れ替わる形である。そして十期四十年の歳月を経て、二〇〇七年（平成十九）、七十七歳をもって引退する。所属は一貫して自由民主党。

私はいわゆる六〇年安保闘争のさなかに共産党の指導方針と対立、除名を食らって一九六一年（昭和三十一年）夏に党を離れ、その後はいづれの党派にも加わらなかつたのだが、寛君がいつまで共産党籍をもっていたかについて、あえて聞いたことはない。

寛君の選挙区は居住する東山で、初当選は山科区と別れる前だった。

（分区は一九七九年）。以降、自民複数当選の七一年（二位）を除いてすべてトップ当選を果たした。

彼の選挙の出納責任者を務めた一沢君（故人）は私の友人でもあったが、「高山君の支持者は手弁当で動いてくれる人が多く、選挙に金がかからないのは共産党と似ている」と感心していた。

寛君が府議の当選を何回か重ねたころ、私は「府議の長期記録をつくっても大したことないで。そろそろ国政なり、おやじさんの後を継いで京都市長選に名乗りを上げてみたら」とけしかけたが、彼は笑っているばかりで、首を縦には振らなかつた。彼を担いで走る後輩に恵まれなかつたのか、もともと欲がなかつたのか。もちろん新しい苦勞も増えることにはなるのだが、私はいまも時々惜しいと思っている。

寛君は自宅を改装した京都女子大学学生マンションの管理者として余生を楽しむ構えだが、私も時々割り込んで昔話に興じ、ボケ防止に努めている。

(二〇〇八年七月二十七日)

編集部から 高山寛氏は「民主運動史を語る会」の十月例会に「父・義三と民統市長選挙の頃」（仮）と題して語っていただく予定でしたが、九月に入院・手術され、延期となりました。

「湯浅貞夫資料を記録する会」からの中間報告(1)

湯浅貞夫さんが亡くなられたのが、96年5月、享年68歳でした。以来、湯浅さんが保管、所蔵されていた膨大な資料をどうするのか。会にとっても大きな関心事で、しばしば論議の俎上のほりましました。

湯浅さんが会の機関誌『燎原』に最初に寄稿されたのが、第19号(81年9月15日号)、「戦前、戦後の京都の農民運動について」、井上甚太郎さんとともに報告された第19回研究例会(福知山、細見幸基さん宅)の報告をベースにしたもの、会の世話人となられたのが82年の総会、後に出版された『目で見える京都の民主運動史』(かもがわ出版、91年3月)の連載が始まったのが23号(82年3月15日号)、シリーズは42回(78号、90年10月15日号)まで。続「目で見える京都の民主運動史」が始まるのが、87号(93年3月21日号)。この前後、京都の民主運動史の掘り起こしに大きな役割を果たされた湯浅さんの所蔵、保管資料は、語る会としても整理、保管する必要性を認識していたものの、その場所がなく、ようやく、かもがわ出版の好意で整理、保管場所が確保されたこともあって、07年10月、段ボール箱にして約30箱を移送。その保管、所蔵されていた資料の整理が始まりました。

現在、会世話人の藤井舒之さんや湯浅俊彦さんたちを中心に、取り敢えず「湯浅貞夫資料を記録する会」として、資料の整理にあたっていているところです。

簡単な資料目録を近々お知らせできるように思うのですが、井ヶ田良治さんも注目された口丹波騒動に関わる資料(湯浅さんの著書でいえば「口丹波一揆物語―天明の地鳴り」など、幾分かの原史料も含んだ古文書の複写資料は、いずれ専門機関に移管、保存・活用をお願いしなければならぬと考えています(湯浅さんもその古文

丹波の歴史探訪、

書関係資料はダンボール箱に別置されていきました。

古文書関係の以外の歴史資料は、市町村別にファイルされており、歴史探訪郷土史講座としても考えられたようですが(丹波町下山澤田さんよりの私信)、主には1988年から始められた丹波歴史探訪の企画のために整理、ファイル化されたものと思われまます。丹波の歴史探訪の企画は、共産党後援会の行事として出発しすめられたようですが、残された資料(企画パンフレット等)からは、以下の通りの企

画が判明します。

第1回「丹波風物詩めぐり」第2回「史跡めぐり」第3回再度の「風物詩めぐり」第4回からは市町村別の企画になり、最初は「八木町の巻」第5回「瑞穂町」第6回「日吉町」第7回「和知町」第8回「京北町」第9回「美山町」第10回「綾部市」第11回「篠山町」第12回「福知山市、夜久野町」第13回「氷上郡」までです。企画の実施日は省きましたが、回によっては参加者名簿、参加者の集合写真も残されていますし、企画の予備調査、事前の折衝なども記録されており、この

13回分の冊子も

時期の湯浅さんの、丹波における歴史の掘り起こし、地域の人々の遺産として共有しようとする具体的な活動を垣間見ることが出来る資料群となっています(企画を紹介したパンフレットはいずれも20頁前後のもの)です。

この歴史探訪の企画が発する時期は、会の実務を担われていた木村京太郎さんが病臥され、『燎原』の会務、編集が奥田修三さん、そして湯浅貞夫さんに移っていく時期と重なっています(奥田修三さんが『燎原』の編集責任者となられたのが88年の1月15日号

(70号)から、湯浅さんは89年1月15日号(75号)から共同編集責任者となられます。会の代表は細野武男さんのままですが、事務所も「東山生活と健康を守る会」から品角一郎さん宅にかわります。

300名を超える会員・会友を擁していた当時、聞き取りなどを紹介し『燎原』を発行し続けられてきた奥田さんと湯浅さん。会誌発送などの日常の会務は、ご夫人に負う所が大きかったとは聞きますが、80年代後半からの、困難だった「語る会」の第二期ともいえる時期を支えながら、かつ、お住まいになっていた口丹波以北の歴史を訪ね、人々の生き様を掘り起こされてきた履歴は、ありし日の湯浅さんの姿を髣髴とさせるものです。(この時期の聞き取りの原稿も残っています。その多くは『燎原』に収録されていますし、丹波地方の歴史の掘り起こし原稿、草稿の多くも、製本されて冊子としてまとめられています。兎も角も資料や草稿の類、関係した資料が丁寧に残されていることに驚かされます。出版に到った書籍については、新聞の紹介記事や読者からの便りまでファイルされています)。

ただ、これらの資料のなかには、聞き取りなど、若干の未発表と思われるものもあり、整理がすすむば逐次『燎原』誌上で紹介させて頂く予定です。

(井手幸喜)

忘れ得ぬ人

谷口善太郎さん

矢島藤太郎（故人、元山城町議会議員）

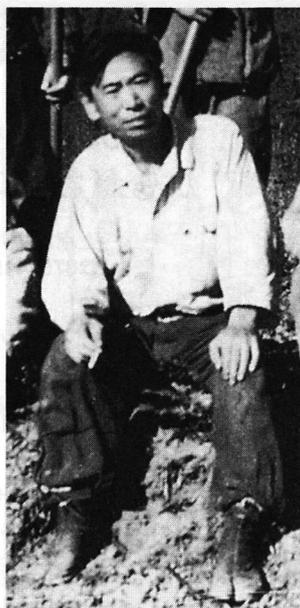
戦争が終わって、労働組合や農民組合など、民主的な組織が次つぎと再建されつつあった頃、京都で日農の集会があった。二百人位集まったと思う。大阪の加藤充（弁護士）さんが興奮して涙を流しながら話したあと、やせ気味でやや背の高い、眼のギョロリとした人が演壇に立った。

何を話されたかは覚えていないが、実におだやかな口調であった。ときどきすまされた鋭さが時局（情勢）をよ

くとらえられており感動させられた。これは、ひょっとしたら黨員かも知れん——そう思った。

休憩のときか、すんでからか、同行した木津の小林という人が、おおい、ええ人紹介したろ、と連れて行かれ引合わされたのは眼のギョロリとしたその人であった。名刺を貰ったが

敗戦直後の選挙風景



谷口善太郎

1899年（明治32年）石川県能美郡辰口町に生まれる。貧農、11歳から労働生活に入り、1921年京都に移住、数年間清水焼労働者として働いた。22年京都の共産党創立に参加、プロレタリア作家としても多くの作品をのこした。戦後は、49年京都1区から衆院議員に当選（マッカーサーにより追放）。60年から5回連続当選、党衆議院議員団長をつとめた。74年6月8日死去、7月20日に追悼式。のち東大谷に記念碑が建立された。（写真は1945年11月、船井郡胡麻の開拓地での谷善

歌二」と書かれてあったのである。「血の鶴嘴」の作者は谷口善太郎さんであったのだ。

生産場面を描け——。一時期、作家同盟はそういつていた。おつかあ、ままくおぞ、白いまんまのやくめしぞ——で始まる「綿」に感激し泣いた。その頃、加賀歌二というのは「綿」

「清水焼風景」などの須井一と同一人だと人から聞かされていた。そういえば小林多喜二もペンネームで、小説ではなく論文を文化連盟のある雑誌に書いており、これはどうやら多喜二らしいぞと仲間です話合っていたが、今「つりのできぬ釣師」（新日本出版）を読んでその辺の事情をつ

かむことができた。

一見、おだやかそうな中にきびしさとするどさがあり、知り合えば離れることのできない人、谷口善太郎さんを私はそのように思っている。巻き舌で荒っぽい語調の、今は反党者となり下がっている神山茂夫とは全くうらはらである。

党が公然化して間もない総選挙（一九四七年四月）で、候補者の谷口さん（京都二区から立候補）が私の家で一夜を明かされたことがある。明かされたというのは、ひと間に六人の家族が住んでいたので眠って貰えなかった——というわけ。今、候

補者をこんな目に逢わせたら何といつて叱られることだろう。のんびりとした頃であった。

明ければ雨。今日は田辺小学校での演説会である。同行四名、会場はガランとした講堂であった。暫くして若い男の人が二人やってきた。そしてそれきりだった。それでも谷口さんは私らとともにその人らのまわりに座を始めて最後まで話し合われた。何という根性であろう。

西瓜、谷善を走らす——、こんなユ一モアを府委員会（地方委員会といつたかも知れぬ）で書いたことがあつた。胡麻の里で作っておられた西瓜の農作業を思い出して走るように府委員会から帰って行かれたという話。

今、最高点で当選させるまで強大になった府党の中に、よたよたしながらもいる私は、ある日そんな昔のことを思い出していた。

（一九七二・八・六記す）

◇（編集部から）この原稿は、京都民報社の松村茂社長から、当時編集長であった私に預けられたもの。一九七二年は、総選挙で一区 谷口、梅田勝両氏が一、三位で当選した年。投稿だったと思いますが、掲載されなのまま私が保管していました。原題は「谷口善太郎さんの思い出」。矢島氏は、一九四七年四月、戦後初の地方選挙で棚倉村の村会議員に当選しています。（湯浅俊彦）

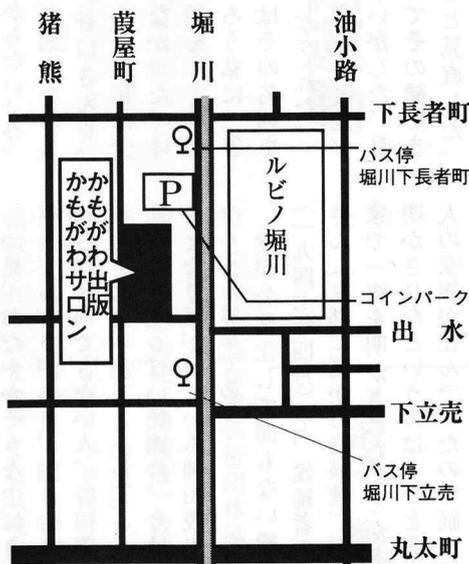
民主運動史を語る会例会案内

日時 10月30日 (木) 午後2時～
会場 かもがわサロン

上京区堀川通出水西入
☎075-415-7902

記録映画「テントからの報告」観賞と当時をふり返る

10月例会は、1面に載せた記録映画「テントからの報告」(56分)をDVDで観賞したあと、当時の争議団のメンバーに思い出やその後の活動について語っていただきます。



例会は隔月に開きます。どなたでも参加できます。会員は無料、会員外の方は300円。

早見栄子さんが証言

8月例会で大映のレパ

民主運動史を語る会の8月例会が8月28日午後、かもがわサロンで開かれ、1950年9月にレッドパージで大映京都撮影所を追われた早見栄子さんが「私のレッドパージ」と題して当時のことを生々しく証言しました。

早見さんはレパのあと芝居が忘れられず、解雇無効の裁判を続けつつ、52年に劇団京芸に入り、以後舞台ひとすじに今日まで歩んで来た人生を語りました。例会には十数人が参加しました。

情報

スクラップ



中西伊之助没後50周年
宇治で記念講演会

宇治市で生まれ、東京を中心に活躍したプロレタリア作家・中西伊之助の没後50周年を記念して8月31日午後、宇治市産業会館で講演会が開かれた。東京学芸大学の李修京准教授が「中西伊之助と日韓の文学運動」と題して講演。生誕の地にゆかりの同市五ヶ庄で顕彰プレートの除幕式も行われた。

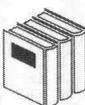
木村万平さんに地方出版文化賞

第21回地方出版文化功労賞「特別賞」に木村万平著『京都破壊に抗して―市民運動20年の軌跡』(かもがわ出版)が選ばれた。昨秋、ブックインとつとりに出品展示された750点を対象に審査されたもので、表彰式は11月1日倉吉市で行われる。

催し案内

国際婦人年京都集会 9月28日(日)午後1時30分～4時30分、ウイングス京都2階イベントホール。金一志さんの韓国伝統舞踊と米田佐代子さん(女性史研究家)の講演「生きるとは 行動するとは」―らいてうのことはから考える男女平等と女性の権利。参加費千円。
河上肇記念会定期総会 10月19日(日)

編集後記



7月27日の朝、西向日町にある故・寿岳章子邸を訪ねた。管理されている田中弘さん(会員)の案内で、昭和初期に建てられた民芸調の家の中に入ったが1、2階とも本、本の山。文章先生時代からのものも含め、ざっと約3万冊がぎっしり書棚などに収められている。

汗だくになって見て回ったが、運動史関係では、しずさんと一緒に始められた「憲法を守る婦人の会」関係の文書が袋に入れられて残っていた。もつと時間をかけて整理すれば「宝物」もありそうだが、図書館にある全集や辞典、専門書の類が圧倒的に多く、これらを処分して、寿岳家に関係する書籍や冊子などに限って保存されるのがいいように思った。

(湯浅)